

(様式2)

平成 21 年度

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1591300056		
法人名	社会福祉法人吉田福祉会		
事業所名	グループホームさわらび		
所在地	新潟県燕市佐渡山4130-1		
自己評価作成日	平成22年2月1日	評価結果市町村受理日	

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.n.kouhyou.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社団法人 新潟県社会福祉士会		
所在地	新潟県新潟市中央区上所2丁目2番2号 新潟ユニゾンプラザ3階		
訪問調査日	平成22年3月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所は、小規模多機能センターさわらびを改修し平成20年4月1日に併設事業所としてサービスを開始しました。旧吉田町において当法人3番目のグループホームです。施設の両隣りには保育園と体育文化センターがあり、毎日園児たちの明るい元気な声が聞こえ交流を図り、体育文化センターでは地域の行事があるたびに声をかけていただき見学や参加させていただいています。また施設の敷地内には小さいながらも畑があります。季節の野菜を利用者と共に育て収穫し、調理に活かしています。昨年中庭にグループホーム側から出れるウッドデッキを増築し、花壇を作ったり、日光浴にと日々の生活の中の潤いの場となっています。職員は皆で作った理念「急がず、焦らず、ゆっくりと」を常に心掛け、利用者本人のペースを大切に、ひとりひとりの生活を重視した支援に努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「グループホームさわらび」は小規模多機能型居宅介護事業所と併設しており、職員は吉田北地区の地域性や高齢者の生活の実情を適切に把握している。行政との連携、協力体制も構築されており、地域の高齢者の見守り役、在宅サービスの拠点としての役割を果たしている。ホームの利用者の半数近くの方が、併設の小規模多機能事業所のサービス利用を経て入居しているので、安心してグループホームへの住み替えができるということもこの事業所の優れている点である。いつの間にか住みついた猫が利用者と職員の笑顔を誘い、ホーム全体ののんびりと落ち着いた雰囲気の花を添えている。職員は、「急がず、焦らず、ゆっくりと」を事業所のモットーとして介護や利用者との関係作りを実践している。ちょっとした会話の中でも笑顔とともに安心感や居心地のよさが伝わってくる。

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	<p>理念の共有と実践</p> <p>地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている</p>	<p>理念は管理者と職員が一緒に作成し、事業所の目につく所数カ所に貼り、常に意識できるように努めている。</p>	<p>地域の中でその人らしく暮らしていけることを大切に考え、「急がず、焦らず、ゆっくりと」を事業所の理念として職員は日々の暮らしを支援している。また、常に理念を意識できるようにフロアやトイレに掲示し、実践を振り返り出来るようにしている。</p>	
2	(2)	<p>事業所と地域とのつきあい</p> <p>利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している</p>	<p>住所地の住宅街と距離があり町内会には加入していないが、地域の親睦会には加入している。建物の両隣りには地域の保育園と体育文化センターがあり、交流や行事には積極的にかかわりを持っている。</p>	<p>近くの町内とは物理的な距離があるため、町内の方との日常的な交流は多くない状況がある。しかし、隣接する体育文化センターや保育園の催し、地域行事への参加などを通じて、地域との良好な関係が築かれている。</p>	<p>近隣地域の町内会長との関係作りを通じて事業所を見学してもらったり、あるいは町内のお役に立つことはないかなど意見を交換しながら、よりいっそう地域との付き合いを深めて行ってほしい。また、事業所がもつ認知症ケアの知識や技術も地域に還元できる取り組みにも期待したい。</p>
3		<p>事業所の力を活かした地域貢献</p> <p>事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている</p>	<p>隣の体育文化センターでの地域の文化祭において、認知サポーターによる介護相談を11月7日開催。その他体育文化センターの玄関に法人の情報誌等をおいたり、保育園の先生の協力のもと、園児に法人から介護相談等のお知らせを持たせてもらったりしている。</p>	/	/
4	(3)	<p>運営推進会議を活かした取り組み</p> <p>運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている</p>	<p>2か月に1回開催し、その際に利用者の状況の報告や困難事例の話し合い、法人からのお知らせや毎回の外部評価結果の報告を行い、サービス向上に活かしている。</p>	<p>2ヶ月に1度の頻度で開催されている。民生委員、行政担当者、地域包括支援センター、家族の代表などから参加してもらい、支援困難な事例、日々の活動報告、課題について意見交換する場として活用し、サービスの向上に役立っている。</p>	<p>事業所の課題改善のモニターの役割や、地域との連携や協力体制を強めるための率直な意見を伺う場として、今後さらなる運営推進会議の活用期待したい。</p>
5	(4)	<p>市町村との連携</p> <p>市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる</p>	<p>市の介護保険担当者が運営推進会議の構成員であり、会議はもちろん日頃から連絡を取り合い協力関係を築いている。</p>	<p>月に2度程度、定期的に市町村の担当者を訪問し、情報の交換や共有、必要な指導を受けている。</p>	
6	(5)	<p>身体拘束をしないケアの実践</p> <p>代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる</p>	<p>事業所でもマニュアル作成しており、身体拘束はしないケアを当たり前として取り組んでいる。</p>	<p>身体拘束をしないためのケアマニュアルが作成されており、定期的に身体拘束に関する研修が行われている。職員は玄関などを施錠することによる弊害などを理解し、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。</p>	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(5-2)	虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	さわらび会議等にて虐待防止について資料を配り、介護職員としての責務を周知している。	法人において高齢者虐待に関する研修会が開催され、職員は関係法律などを学ぶ機会を得ている。職員同士で互いに注意を払い虐待の防止に努めている。	
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	さわらび会議等において権利擁護と成年後見制度について勉強会を設け知識の向上を図っている。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には、利用者及び家族に十分に説明し理解納得を得ている。		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	事業所と家族との間での連絡帳を活用し、意見、要望を伺っている。また、法人全体で利用者・家族に定期的にご意見承り書を発送し、意見・要望それに対する回答を掲示している。	家族との連絡帳があり、これを活用し、家族からの意見、要望を運営に活かすよう努めているが、家族から意見、要望などはあまり挙がってきていない。利用者からは、日々の関わりの中で意見、要望を把握するよう努めている。	職員は利用者の言動から、意見、要望を聞き取るよう努めているが、利用者の声を運営に反映できるまでには至っていない。本人、家族から意見、要望を聞き取るために一層の工夫、努力をし、利用者、家族の声を運営に反映してほしい。
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	さわらび会議あるいは日々の申し送り時に意見・提案を聞く機会を設けている。	職員会議である「さわらび会議」などにおいて職員から自由に意見や提案を出してもらう機会を作り、運営に反映させるよう努めている。また、管理者と職員の間には介護リーダー職員を置くことにより、意見や提案が言いやすい環境作りにも努めている。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課を導入しており、客観的事実に基づき本人の役割や勤務態度、仕事に取り組む姿勢等評価している。役割は考課者と被考課者が面接し決めている。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人の各専門部会の研修や法人外の研修を、本人の役割や経験を考慮してできるだけ参加させている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人全体の介護職員の「介護を熱く語る会」に参加させ、違う事業所職員の考え方や事業の進め方、ケアの取組等を介護の質の向上に努めている。また、燕・弥彦グループホーム連絡会にて研修会や情報交換会を定期的に行っている。		
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	相談を受けた時点で本人の思いを受け止めるよう努めている。		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談を受けた時点で家族等が困っていること、求めている事等を受け止めるよう努めている。		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	例えば、本人の状態や介護レベル、医療面の内容等を検討して、地域包括や事業所サービス、専門医の紹介など対応している。		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	調理の下ごしらえを一緒に行ったり、味付けのアドバイス、野菜の育て方や収穫等一方通行の関係ではなく支え合う関係を築くよう努めている。		
19	(7-2)	本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時や電話連絡にて定期的こちらでの生活の様子を伝えるとともに、家族からこれまでの生活についての情報収集を行い、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	家族の面会の際は、利用者の生活の様子や体調などについて話し、家族とともに利用者を支えていく姿勢を家族に伝えている。また、受診等は家族に協力をお願いするなど、家族の役割を確認し、本人と家族の絆が切れないよう配慮している。	
20	(8)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	勤めていた職場の人に会いに出かけたり、以前利用していた事業所や仲間に関係が途切れないよう、会いに出かけたり来てもらったり支援している。	なじみの床屋や以前通っていたデイサービスでの友人などとの関係が途切れないよう、会いに出かけていくことを支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が孤立しないよう、職員が気を配り支える関係作りに努めている。		
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現在のところ死亡による契約解除一件のみであるが、今後の対応の中で項目のような事例が発生した場合は、継続的な関わりを続けていきたい。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人一人の思いや意向を日々の関わりの中で気付いたこと等を持ち寄り把握に努めている。困難な場合は、家族等から本人の人柄や性格、こだわりを聞いたりして把握に努めている。	センター方式のアセスメントシートを活用し、利用者一人ひとりの思いや暮らしの希望などについて把握するよう努めている。職員一人ひとりは利用者の声や思いを受け止めているが、シートへの記録が十分ではなく適切に把握しているとはいえない。難しい。	職員一人ひとりが把握した利用者の思いや意向を、よりいっそう支援に反映できるように、センター方式アセスメントを用いた情報の共有のあり方について職員全体で再度検討してほしい。
24	(9-2)	これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	他の事業所を利用していた場合は担当ケアマネからと本人との面談により情報の把握に努めている。また、実際にサービス利用を提供している関わりの中で新たに発見した情報は記録し、今後のサービス提供の内容に盛り込むよう努めている。	職員は、食事の時間やお茶の時間、個別に関わる際など、利用者との日々の暮らしの中から、一人ひとりのこれまでの生活や家族のこと、なじみの事柄などについての情報収集に努めている。	
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の能力を見つけ出し、介護計画の一部として本人のできる事支援計画として実行している。		
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人が望む事や意向に関わりの中で聞き出し、家族の思いや他の職員の意見などを求めながら担当職員が作成している。設定した期間を基本に見直しをしているが、本人の状態変化、家庭環境の変化、また新しい発見等により弾力的に計画を変更している。	計画作成担当者と職員が協力し、本人の意向を踏まえ、医療機関など関係者の情報をもとに介護計画を作成している。	本人、家族の意向が介護計画に十分反映されていない。チームの一員としての介護者、本人からの意向や思いを聞きだすようさらなる工夫に努め、介護計画に反映させてほしい。
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録は事実やケアの気付きを具体的に記し、情報として共有し、見直しに活かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	併設している小規模多機能センターとの交流を活かし、職員・センター機能を共有し柔軟な支援を行っている。		
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	両隣の保育所・体育文化センターとはよりよい関係を築いている。利用者のサービス提供に活かしている。		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医とは連絡を取り合っており、いままでもかかりつけ医がいなかった利用者については、紹介したりしながら適切な医療を受けられるよう支援している。	利用者本人や家族が希望する医療機関に受診してもらおうようにしている。かかりつけ医からは定期的に往診に来てもらったり、電話により直接指示を受けたりと良好な関係を築いている。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は法人の訪問看護ステーションに委託契約をしており、健康管理に必要なアドバイスをもらっている。また、互いに情報を交換しながら利用者を支え合っている。		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した場合はケアマネージャーを通して病院の相談員と連携をとっている。また、職員ができるだけ入院先に訪問し、本人の状況や家族・看護師からの情報を収集している。本人にグループホームに早く戻れるよう励ましたり、仲間の事を伝え退院の意欲を高めるよう努めている。		
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期とは限らないが、利用者の日常の中での変化をかかりつけ医と連絡を取り合い、本人にとってより良い支援になるよう努めている。	重度化や看取りのあり方については、本人・家族の意向を大切に、医療機関と連携しながら検討している。	本人・家族の意向を大切に支援することとしているが、重度化した場合や看取りについての方針を明文化するには至っていない。本人・家族のより一層の安心や、職員等関係者間でのさらなる認識の統一につなげられるよう、方針の明確化に期待したい。
34	(12-2)	急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	全職員救命講習を定期的を受けており、急変時対応や事故発生時の対応はマニュアル化されており、会議等で確認している。	法人の全職員が消防署の救急法の研修を受けており、利用者の急変や事故発生時に備えている。また、緊急時の対応マニュアルも整備されており、いつでも活用できるようになっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防計画(災害計画)に従い避難訓練(夜間想定・日中)や点検を定期的に行っている。避難訓練は利用者参加のもと行っている。	火災や地震などの災害時に利用者を安全に避難させることができるよう、防災計画に従い、定期的に設備の点検や防災訓練が行われている。避難経路の確認や予想される災害を想定した職員の召集方法などについても日頃から検討が行われている。	隣接する保育園や体育文化センターと合同で防災訓練を行うなど地域を巻き込み、地域の協力を得られるような体制作りを目指して欲しい。また、地域の方々にグループホームを知っていただく努力をするとともに町内会長などを通じて地域の消防団の協力をいただけるような働きかけを期待したい。
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	あらゆる介護の場面で声かけを行いその人の意思を尊重し、プライバシー保護の意識を持って接するよう努めている。また、プライバシー保護については会議等で研修している。	職員は利用者一人ひとりを人生の先輩として敬う姿勢を持ち、人格やプライドを尊重した言葉かけやケアを実践している。	利用者の個人情報などが必要のない第三者に見られることがないように、鍵のかかる保管庫で管理することが望まれる。
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いや希望を表わせる利用者には自分で決めたり納得しながら暮らせるよう支援している。また、自分で思いや希望を表わせない利用者には家族等や職員の気付きによるところから支援している。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日その日の趣味や興味に合わせて、散歩、編み物、料理、ゲーム等希望に沿って支援している。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	理美容は入所前から利用していたなじみの店に出かけている。着替えの服も本人と一緒に選び、好みの物を身につけてもらっている。		
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	皆が食べたいものを料理本で探してみたり、料理の下ごしらえを利用者が分担したりして一緒に取り組んでいる。昼食は職員も一緒に食事している。	利用者の食べたいものをメニューに取り入れれたり、利用者と職員と一緒に楽しみながら下ごしらえなどを行っている。昼食は、利用者と職員が会話をしながら一緒に食べている。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量の観察を行い、必要時捕食を用意している。また、献立は法人の管理栄養士に定期的に確認しアドバイスをもらい、バランスの良い食事提供を心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後歯磨きを行っている。必要時法人の歯科衛生士からの助言をもとにその人に合った口腔ケアを支援している。		
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレで排せつできる方には出来る限りトイレで排せつしてもらっている。尿意・便意がはっきり認識できない方には、日々の関わりの中で排泄のサインを見つけ出し、早めにトイレ誘導するなり、おむつ交換するなりして不快な思いをしないように対応している。	利用者一人ひとりの力を把握して、できるかぎりトイレで自立した排泄ができるよう支援が行われている。利用者の自尊心に配慮した声かけを行い、排泄の失敗を軽減するよう努めている。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	繊維質を含む料理の提供を意識している。定期的に乳酸菌飲料を提供している。また、重度の便秘の方には排便状況をチェックし下剤の加減を行っている。		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	小規模多機能センターとの併設のため入浴設備も共有しており家庭浴槽でないため一緒に入浴している。そのため曜日や時間が決められているが、その日の本人の体調や希望などにより柔軟に対応している。	併設の小規模多機能型居宅介護事業所と入浴設備を共有しているため、曜日や時間が決められているが、中でもできる限り、利用者の意向に沿うよう入浴の支援が行われている。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者それぞれの生活習慣を尊重し、自分の部屋でベッドや布団で自由に過ごしてもらっている。		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の服薬情報をファイル化しており、職員はいつでもすぐ確認できるようにしている。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	各自のできる事を見つけ出し、介護計画に盛り込みそれに基づいて支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日、戸外で行事がある時は外出支援を行っている。また、気候のよい季節は日常的に前の公園へ散歩に出かけている。	天気の良い日は利用者の希望により近くの公園に散歩に出かけている。お花見などの季節ごとの外出行事も企画し、利用者の希望を大切にしながら、ドライブを兼ねて皆で出かけられるようにしている。	
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人の嗜好品の購入やお祭りや行事で外出した際に本人にお金を渡し、買い物を楽しんでもらっている。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家人や知り合いに連絡を取りたいと要望がある時や不安感がある時、電話の使用の支援を行っている。手紙は要望があればいつでも支援するよう努めている。		
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	あまりゴチャゴチャせず、かといって殺風景にならないよう飾り付けや置物には気を配っている。	居間はゆったりとした空間であり、利用者が自然と集まってくる。中庭にはテラスがあり、新鮮な空気や陽の光を楽しんだり、お茶を飲んだりできるスペースとなっている。今後はたたみスペースを作ることと考えており、コタツなど置いてより居心地のよい空間づくりを目指している。	
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	併設された小規模多機能センターフロアで昔馴染みの仲間と自由にお茶を飲みながら談話できるようにしている。		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	全居室フローリングであるが、本人の様態や在宅での様子も踏まえ畳を用意したり、使用していたタンスを持ちこんだり、出来るだけ居心地が良くなるよう支援している。	ベッドまたは布団の使用は、利用者の好みや生活習慣で選んでもらっている。なじみの生活用品や家具なども自由に持ち込んでもらい、泊まりの部屋がその人らしく居心地の良い空間となるよう支援が行われている。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室ドアには大きめの字で表札がかかっており、トイレ、風呂場など大きな字やマークで示している。		